

令和5年度 第1回

早稲田大学所沢校地B地区自然環境評価委員会

会 議 次 第

日時：令和5年11月29日（水）

15時00分～

場所：早稲田大学所沢キャンパス

100号館5階第一会議室

1. 開会・あいさつ

2. 議 事

- (1) 前回評価委員会議事録の承認について
- (2) B地区の開発状況について
- (3) B地区自然環境評価委員会の運営(案)について
- (4) B地区におけるモニタリング調査の結果について
- (5) その他

3. 閉 会

**令和5年度第1回 早稲田大学所沢校地B地区自然環境評価委員会
議事要旨(案)**

日時：令和5年11月29日（水）15時30分～17時30分

場所：早稲田大学 所沢キャンパス100号館5階第一会議室

出席委員：A委員長、B委員、C委員、D委員

1. 開会・挨拶

○評価委員会事務局（E）：皆さんお揃いでしょうか。今日はB地区のフィールドを歩きながら、狭山丘陵の秋を実感され現地の直近の状況について把握していただきましたが、これから室内での議事に入ります。本日は、先ほどのフィールドでの視察の始めにもご挨拶・ご紹介いただきましたが、この6月から総務部の部長と担当課長が交代となりました。委員会の開会に先立ちまして、F総務部長からご挨拶をお願いいたします。

○早稲田大学総務部長（F）：改めまして、皆様こんにちは。早稲田大学総務部のFと申します。委員の先生方におかれましてはお忙しい中、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。本日は先ほどの現地視察の状況とモニタリングの結果も踏まえて、本学のB地区での取り組みについてご意見いただけますと幸いです。ご紹介の通り私は6月に総務部に異動してまいりました。所沢B地区の存在は知っていましたが、実際に中に入ったことはなかったので、赴任直後早めの9月、暑い時期に自然環境調査室のメンバーに案内していただき、今日と同じ行程を歩きました。その中で、貴重な自然が残されているということと、一方でナラ枯れ等の問題があって早急な対応が必要だということを確認しました。B地区全体を回るのは今日で2回目でしたが、さらに理解が深まったと感じています。この間、自然環境調査室は学内での所管が教務部から総務部に変更りましたが、その機能については変更ありません。目的は本学の自然環境の保全ということですので、引き続き「自然環境評価委員会」と「自然環境調査室」は課題や情報の共有をして、未来志向の取り組みをしていければ幸いです。また、今年の3月に開催された、令和4年度第2回の本委員会において、本学から「自然環境評価委員会」の運営についてご提案をしています。いろんな視点で、ご検討いただいたと伺っています。誠にありがとうございました。それでは、本日はどうぞよろしくをお願いいたします。

○評価委員会事務局（E）：F部長ありがとうございました。本日の出席ですが、4名の委員にご参加いただいています。当初は大正大学のG先生もご参加という予定でしたが、急遽来られないということで、意見書を昨日いただいています。意見書に変えて、皆様によろしくお伝えくださいということでした。議事に入る前に、本日の資料の確認をいたします(資料確認)。資料の過不足はないでしょうか。それでは、この後の議事につきましては、A委員長にお願いしたいと思います。

2. 議事

(1) 前回議事録の承認について

●A委員長：みなさんこんにちは。1年ぶりにB地区の貴重な空間を拝見しまして、昨年感じた

以上に樹林の変化が早いという印象を持ちました。いろんな意味で、ここは自然が継続的に残されていて、それに対していろいろ考えていかなければならない課題も、多く残っていることを実感しました。それでは、議事次第に従って進めていきます。最初に、前回の評価委員会の会議録の承認について、事務局から説明をお願いします。

○評価委員会事務局 (E)：お手元の資料の議事録につきましては各委員、大学関係者、県と市の方々には、2週間前に送らせていただき本日までのところ、追加・修正等のご意見はありませんでした。特になければ、この場でこれをご了解いただければと思います。

●A 委員長：特に事前の変更はないということで、委員の皆様方ご意見等ありませんか？もしましたら、ご承認頂いたということにいたします。

(2) B 地区の開発状況について

○評価委員会事務局 (E)：この件については、前回の評価委員会で総務部提案の文書を頂き、その中で毎回の委員会の開催時に B 地区の開発状況について担当課からご報告いただくということになりました。今回から新たに議事の(2)の中に入れてありますので、担当課から B 地区の開発状況についてのご説明をお願いします。

○早稲田大学キャンパス企画部企画・建設課 (H)：施設を担当しています、キャンパス企画部企画・建設課の H です。本日は、よろしくお願いいたします。(2)の議事にある B 地区の開発状況について、ご報告します。前回の議事録にも記載がありますが、現段階で B 地区、また A 地区も施設整備計画はありません。しかし所沢キャンパスを主に活動拠点としている人間科学部、スポーツ科学部の研究・教育活動というのは、今後も発展を望んでおりますので、将来的に施設のニーズが潜在的にあると考えてます。少し様子を見て、場合によっては施設の整備の計画に移りたいと検討しております。以上ご報告とさせていただきます。

●A 委員長：ありがとうございます。何か動きがありましたら、またご報告をよろしくお願いいたします。それでは引き続いて、(3)B 地区自然環境評価委員会の運営(案)についての議論を進めていきます。私が「委員長見解」という形で資料を示しておりますので、それについてお話いただいた後で我々の意見を議論の形で進めたいと思います。説明をお願いします。

(3) B 地区自然環境評価委員会の運営(案)について

○評価委員会事務局 (E)：先程ご承認いただきました議事録にも載ってますが、前回 3 月の評価委員会の中で「総務部提案」という形の文書でいくつか大学よりご提案いただいて、その時点では次回までに検討するという事になっていました。その後、委員長と相談する中で、「委員長見解」という文書にした形で、大学側にご検討いただくのが望ましいのではないかという話になり、まず事務局と委員長で主要な論点についてまとめました。その後、各委員とこの文章を通じて、部分的な追加修正等のご意見をいただき、今回の資料にあります、「委員長見解」という文書になりました。読み上げました後で、ご議論いただければと思いますので、まずは読み上げさせていただきます。

「早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会の運営について(案)」に関する委員長(評価委員会)見解。2023 年 3 月 30 日に開催された「令和 4 年度第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」において、早稲田大学総務部より「所沢校地 B 地区自然環境評価委員会の運営について(案)」が、提案された(資料 1)。この件に関しては、この数回の評価委員会で議

論され、各委員や関係者、所沢市からも意見聴取が行われているところである(資料 2)。3月30日の「総務部提案」については、評価委員会の当日初めて各委員に提示されたこともあって、次の評価委員会において改めて検討することになったのは、委員会議事録に記されている通りである(資料 3)。上記の経緯を踏まえ、この間に各委員とも協議を行い評価委員会としての一定の方向性を得たので、「所沢校地 B 地区自然環境評価委員会の運営について(案)」に関する委員長の見解を、下記に示す。

1.当評価委員会の目的である B 地区の開発計画への検討・提言を行う役割について、当面新規の開発が見通せない現状にあって、提案【1】で示された B 地区の開発状況を毎回担当部署から報告を受けたうえで、これまでの開発等に伴うモニタリング結果の検討を行うことは、評価委員会の責務を確認する運営のあり方として適切と考えられる。ということで先ほどの議事の(2)にあげた担当セクションから報告いただいた、ということになります。

2.その上で、B 地区に限定しない所沢キャンパス全体を含む所沢地区全般を対象とした情報共有・意見交換の場とする提案【2】については、B 地区の名称を有する委員会であることから、本来、評価委員会の「設置要綱」を見直すことが最もふさわしい対応と言える。しかしながら、「設置要綱」の変更は相当の時間等も要することから運用の中で対応を図りたいとの総務部の説明に対して、各委員からその認識を尊重することの同意が得られたため、「設置要綱」は現状のままとし柔軟な運用により、提案内容の委員会の議事運営を図るものとする。

3.評価委員会を B 地区を始め所沢キャンパス全体や所沢市域も含めた、より有意義な情報共有・意見交換の場とするに際しては、現在の社会情勢を踏まえ、生物多様性条約締約国会議(COP15)や生物多様性国家戦略 2023-2030、生物多様性ところざわ戦略等で、世界および全国・地域レベルにおいて求められている「2030年ネイチャーポジティブ(自然再興)」、「30 by 30」、「OECM(自然共生サイト)」等の優先度の高い生物多様性施策や SDGs に照らして、ふさわしいテーマを選定し議論することが望ましい。

4.毎回の評価委員会の議事における情報共有および意見交換のテーマや、報告者等の具体的な選定と進め方に関しては、予め早稲田大学総務部・評価委員会委員長・評価委員会事務局で協議調整を図り、委員会の円滑な運営を可能とするよう努めるべきと考える。また、各委員や所沢市からの意見(資料 2)を踏まえて、評価委員会の場を効果的に活用し、早稲田大学が所沢校地(A 地区・B 地区)や狭山丘陵・所沢市内等で取組む、先端的な生物多様性対策を広く社会にアピールすると共に、自治体を始め関係団体・企業等との連携協働をさらに進める場となるよう、効果的な運営に最大限留意するものとする。

5.評価委員会と一体となって B 地区等の保全に重要な役割を担ってきた「自然環境調査室」については、早稲田大学は学内の専門機関として位置付けていることを、これまで対外的に説明してきた経緯がある。今後の B 地区等の保全対策や対外的な対応にあたって、この「自然環境調査室」と学外の第三者機関としての「評価委員会」を2つの柱とする推進体制を堅持していくことが、肝要と言える。そのためには「自然環境調査室」において、専任職員を主たる担当者とする現状の人的な体制が維持されることが専門機関として最も望まれるが、大学の諸事情により有期の雇用者を主たる担当者とする体制へと変更することがやむを得ないものであるならば、「自然環境調査室」が長年にわたり蓄積してきた学術的知見の活用や、学内外の関係機関との連携・調整等の機能が着実に継続されることが、不可欠の要件と考えられる。

6.この点に関して、昨年雇用の嘱託職員がすでに一度退職している現状にも鑑み、専任職員の

学内他セクションへの異動後も、「自然環境調査室」および「評価委員会」に対し、これまでの知見や現場の経験が継続されることが可能となる、何らかの学内的な仕組みを早稲田大学として明確にさせていただくことが望まれる。また、「自然環境調査室」の主たる担当者が、不安定な雇用体系のままであることは、専門機関としての調査室の継続性に関わる懸念にもなるため、将来的に安定した専任体制による運営に戻していただくことを、評価委員会の総意として要望するものである。ということが、委員長の見解書としてとりまとめたものになります。それから先ほどお話した、今日欠席の高橋委員から A4・1 枚の資料が皆様のお手元に届いていると思います。これについても、議論の前に読み上げさせていただきます。

11 月 29 日開催の評価委員会への参加を予定していましたが、所用により欠席することになりました。つきましては、議事(3)にある標記の運営(案)に関して委員会事務局に意見を申し上げたところですが、改めて私の関心事についての見解を提示させていただきます。総務部提案文書の「2. B 地区に限定しない情報交換の場を新たに設ける」は、現状の委員会をさらに有意義な場とするうえで大変望ましい提案と思います。協議内容に関しては、委員長の見解書にあるように現在の社会情勢を踏まえた、生物多様性政策のテーマを取り扱うことがふさわしいものと考えます。具体的には、この間の評価委員会でも話題とされてきた「30 by 30」に基づく「自然共生サイト(OECM)」認定を所沢校地で進めることを、主要な課題としてはいかがでしょうか。私は、環境公共政策を専門としていますが、所沢校地は環境省や国際的な認定基準を十分満たしていると共に、前回の委員会で提示された開発許可申請に基づく所沢校地全体の開発計画を進めることとの整合も十分図れるものとなります。現在、国内の様々な関係主体がこの環境大臣認定に取り組んでいます。COP15 で示された「ネイチャーポジティブ 2030 年目標」に向け最も社会的意義の高い施策として、早稲田大学が長年にわたり所沢校地で進めてきた独自の取組みを明確化するうえでも、この委員会で継続的に議論していくことが望ましいと考えます。評価委員会および早稲田大学として、ご検討いただければ幸いです。ということで、高橋先生からご意見をいただいております。この件の意見については、以上です。

●A 委員長：ありがとうございます。我々の総意として、どういうことをお願いしたいかを取りまとめて早稲田大学さんにお渡ししていますので、この点についてのお考えをいただければと思います。よろしく願いいたします。

○早稲田大学総務部長 (F)：本学からの提案につきましては、1.2.番についてご賛同いただきまして誠にありがとうございます。それから 30 by 30 等、新たな課題につきまして今後、この場を通じて議論をさせていただき、本学として何ができるかということを検討する材料にしたいと考えています。是非、価値観を共有して、未来志向に立っていければ良いというように思っております。それとかねてから、自然環境調査室の体制についてご心配いただいております。今、当該調査室のメンバーがおりますので、その人事異動に係わるようなこと、センシティブなことですので、言葉を選んでお話したいと思っています。私も自然環境調査室を預かる身といたしましては、そのような人的体制が一番だと思っています。そのため、これまで長年培ってきた知見や経験などを維持して、これまでの事業がしっかり継続していくことを優先課題と位置づけ、職場運営に取り組んで参ります。

●A 委員長：ありがとうございます。早稲田大学としては、今のようなご回答でした。ここで委員の皆様にお考え、ご感想等伺いたいと思います。

●D 委員：本日は B 地区の現状を見せていただき、どうもありがとうございます。今日示され

た委員長見解の 5.6. のことがまさにこれに尽きると思いますが、私は以前から B 地区湿地は狭山丘陵、埼玉県およびに所沢市としても宝物であり貴重な財産であると思って、何度も話して来ました。同時に今までに蓄積されてきた知見も、それも同様に宝物だと思っています。今後、この宝物をどう地域・社会に発信していくのか。それを考えたときに、専門機関としての自然環境調査室に専任の職員がいなくなる点が懸念される、と率直に思います。私の理解では、長年ご尽力されてきた I さんが 2・3 年、または 3・4 年後に戻って来られると良いと思いますが、I さんには何らかの形で顧問またはどのような立場かは分かりませんが、B 地区湿地あるいは環境調査室に継続して関わってほしいと思います。

●A 委員長：ありがとうございます。B 委員はいかがですか。

●B 委員：今、D 委員から言われたことは私も全く同じ思いでいます。繰り返すようですが、この B 地区の湿地、あるいはその周りの樹林地は狭山丘陵の中でも、特筆すべき良好な緑地であると思います。私自身、狭山丘陵の中で特に鳥類相の調査を行っていますが、この湿地で鳥類の標識調査を行うたびに、他の地域に比べてすごい豊かな鳥類相が保たれていることを常に感じています。それから今年、さきほどの話にありました「自然共生サイト(OECM)」の申請が始まり、埼玉県でもいくつか認定されました。認定された場所の一つがトトロのふるさと基金の狭山丘陵のトラスト地、飯能市天覧山の里山の地域と 2 つ認定されており、私はこれらのサイトの会員でもあり関心を持ち見てきました。大学では、キャンパスまたは例えば北大、ICU では大学所有の自然林も登録されています。そういうのを見るたびに、早稲田大学の所沢キャンパスも OECM の登録地として価値があり是非、申請に手を挙げるべきにふさわしい場所ではないかと思っています。その際、一般的に OECM 認定申請にあたっての体制作りが、一番のネックになると思います。現在の段階でここでは「自然環境調査室」と「自然環境評価委員会」の二十数年来の取り組みによって体制はすでに十分構築されていると思います。申請に対して開発計画はネックにはなりませんし、この評価委員会の今後のあり方を考える上でも OECM に申請して、推進していくというのは大きな目標になるのではないかと考えます。是非 OECM に早稲田大学としても手を挙げて頂きたいと強く希望します。それにあたり、推進体制の要である「自然環境調査室」の体制が維持強化されなければならないと思います。そのためには、専門の職員が専任である体制が維持されることをやはり望みたいです。この早稲田大学のキャンパスとその周りの県の緑の森博物館、トトロのふるさと基金のトラスト地、所沢市の里山保全地域と、いくつかの保全地域が所沢キャンパスの周辺に重なっておりますが、できれば大学が中心になりリーダーシップをとって、この地域の保全の推進役を担っていただければと思います。

●A 委員長：ありがとうございます。C 委員はいかがですか。

●C 委員：D 委員と B 委員がお話になった以上のことはありませんが、少しだけ付け加えさせていただきます。OECM へは早稲田大学の「自然環境調査室」が中心になるべきですが、その際、周りの所沢市の里山保全地域、トトロのふるさと基金のトラスト地などがありますが、そういう様々な組織による場と自然環境の場というものを上手く連携させ、さらにいい形のものを作っていくのはどうでしょうか。この委員会は年に 2 回開かれますが、その時にこの所沢の「自然環境調査室」の意味を考えたとき環境保全や環境教育を周りの人たちに対して行うなど、いろんな連携のあり方が考えられます。それから、大学の研究とこの調査室の関係が上手く有機的につながるとい議論がありましたが、この OECM という形で中心になって貢献するとい

うのは、我々が今までずっと議論してきたことのある意味での到達点の一つだと感じています。それが達成されれば 20 年以上に渡って行われてきたこの取り組みが、一つの目標に達成して更に発展していけると強く思っています。私は、この所沢キャンパスができる直前の頃にドクターコースの学生でしたので、この開発に当たって様々な議論があり、そしてこの自然を上手く守りながら、地域の方々ともうまく交流しながら大学としての貢献をするという約束のもとに、開発を進めてきたのを見てきました。その中で「自然環境調査室」ができて、J さんや I さんが非常に努力をしてこういう形になったと思います。「自然環境調査室」が長きにわたりしかもこのような非常にいい形になるとは、多分最初だれも思ってもいないことだったかもしれませんが、今では所沢のこの辺を中心とした里山の研究と言えば「自然環境調査室」を抜きにして考えることができない状況になっておりますので、是非良い形で次のステップに登って欲しいと思います。良い組織が動くためには、人がいて場所があってそれぞれが有機的な繋がりをもって良い研究ができる。それから、学生の教育であつたら良い教育ができるということがあって初めて、成り立つものと思います。そういう意味からも、先ほどから意見が出ていますが人をどうするかという部分に関しては、柔軟で広い視野をもって考えていただけると良いと私は思っています。ここ長いこと私は生態学会とも関係していますので、ここで行われていることの意義が、主観的にも客観的にもある程度分かります。早稲田大学としては「自然環境調査室」が動いていて、周りの所沢地域とも上手く行われているので何ら問題ないと理解されているのかもしれませんが、現在では「自然環境調査室」の働きがそこにとどまらず、さらに大きなものになりつつあります。大学でも十分に認識していると思いますが、このあたりに関しても心のどこかに留めていただけると非常に助かります。

- A 委員長：ありがとうございました。委員の皆様方のご意見を伺っておりましたので、私からは全く付け加えることはありません。同意見でして、ありがたいことに先ほどの見解書で提示した 1 から 6 までの内容に関して皆さんのご認識を伺って、早稲田大学としてご対応をしていただけということと理解いたしました。ご検討をよろしくお願いしたいと思います。人事のこととはなかなか難しい点があるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

(4)B 地区におけるモニタリング調査の結果について

- （公財）埼玉県生態系保護協会（0）：説明省略
- 早稲田大学自然環境調査室（I）：説明省略
- A 委員長：それぞれのモニタリング結果のご報告、ありがとうございました。ご質問、ご意見を伺いたいと思います。いかがでしょうか。
- B 委員：貴重な報告ありがとうございます。いくつかお聞きしたいんですが、一つはオオヨシキリが全然営巣しなかったということですが、渡来したのかしてなかったのか。もし渡来していたら数と渡来時期、あるいは生息していた期間を教えてください。それからカヤネズミの今年の営巣数が現時点で分かっているならば、数を教えてください。あと、アライグマの捕獲はされているのかどうか。それとミゾゴイの映像ですが、カメラを設置した場所を教えてくださいと思います。
- 早稲田大学自然環境調査室（I）：オオヨシキリについては、5 月の中旬に 1 度鳴き声は聞いています。しかし繁殖については確認できておりません。カヤネズミについては毎年 12 月の第 1 週から調査を開始しております。またアライグマの捕獲については、所沢市の捕獲に協力と

いう形で、所沢市が校地の中に捕獲用の罠を設置することを許可しております。

- B 委員：ありがとうございます。さきほど生態系保護協会の報告で、ススキ草地の説明がありました。しかし、「草地再生エリア」ではススキの面積がずいぶん少なくなっているのが気になりました。その代わり樹木が面積を占めているようなので、カヤネズミの数が減っているとしたら、アライグマもあると同時に、ススキの面積も減少しているのが関係しているのではないのでしょうか。できれば、このエリアでは伐採の検討もしていただきたい。今日歩いていても気になりましたが、湿地の南側の樹木が成長していて影が大きくなっているのも、これも気になります。これから湿地南側の樹林をどうしていくか検討されると思いますが、個人的には伐採した方が生物多様性には良いと考えられます。
- A 委員長：ありがとうございます。他はいかがですか。
- C 委員：感想ですが、埼玉県生態系保護協会のプレゼンテーションが素晴らしかったと思います。今までも色々聞いていましたが、全体の流れがある中でそれを上手くまとめられながら何をどうやってやっているかというところが良かったです。Iさんのプレゼンテーションも上手く非常に良いと思いました。細かい点で色々気になる部分はありますが、萌芽再生をして2年目、5年目、14年目、それから湿地は放棄して何年目とありますが、そういったものの意味とか、この所沢B地区のそうした場所がどういう価値を持っているかとか、そういうものを維持する為に、どうすれば良いかという提言をするプロセスの提案は、どうでしょうか。またモニタリングをした結果は今まで通り行い、それとは視点を変えた形でどんな意義の為にやっているか、どのような価値を持っているかの視点があると良いと思いました。また、ススキの草地で多様性を増やすために色々な種を導入していますが、そのような場所がどういう価値があるのか、どういう所へ持って行くと、一つ上の段階へ進めるのではないかという事を感じました。また、Iさんのプレゼンの「B地区湿地保全計画2024」のスライドに非常に興味があります。2番目の保全と活用という点では今までは多様性の1軸ですが、そこから次に向かってのステップが上手くいけたら、研究・調査でもさらなる発展が期待できると思います。
- A 委員長：ありがとうございます。D委員いかがでしょうか。
- D 委員：ご報告ありがとうございます。直接的には報告内容と関係ありませんが、ナラ枯れが気になります。東京都側は来年度4,000本の樹木を対象木として、順次伐採があると思います。その様に景色が変わる、雑木林が変わっていく中で、こちらの湿地にどのような影響があるかが気になります。植物はないにしても、昆虫類、動物類は影響があるかもしれません。そういう意味でのモニタリングを続けていくことが、大事な要素ではないかと思いました。
- A 委員長：ありがとうございます。さきほどB先生が触れた、ヨシ原が樹木の影になり衰退する傾向があるということに関連してですが、この地域全体についての考え方につながることで、基本的に生物の多様性をいかに維持するかが目標になると思います。それは立地条件がベースにあり、そこでどういう生き物が維持できていくかということにつながり、その立地環境には色々な要素があって常に変化し、一定ではない。その時間軸の中で我々は常に対応しなければならぬので、先ほどの話の場合ではヨシ原に戻すように、ヨシ原を回復するためには樹林を管理することがそれにつながるかもしれません。それが本当なのか、それをやるべきことなのか。本当かどうかというのは価値観が入るので、一概に言えないと思います。やるべきことなのかについて考えるときに、いくなれば立地環境が変わっています。ですから、それをもとに戻すべきなのかということが課題として出てくる気がしました。いろんな意味で、これ

はまさに長年にわたる皆さんのご努力があり、自然との付き合いが年々あり、そこでデータが取られた上で、それを見て始めてものが見えてくることとなります。話を短くして言うと、最終形はないだろうという気がしました。我々がどう自然と付き合うかという付き合い方に関しても、短い時間軸の中で視点が変わってきているのも事実であり、視点の変化はこれからも続く気がします。そのため、ここでこうせねばならないという事は、単純な結論としては言えない気がします。その場その時の時代背景に基づいて、我々は最適な解をどう考えていくか、ということが今後もずっと継続していくのではないかと思います。ですから、そういう意味で最初の話に戻りますが、ここ自然の現状を熟知した方がずっと係わるという事が、非常に大事になります。我々から次の世代にバトンタッチする形で、この自然に関する取り組みを継続していただければありがたいです。個人のお名前をあげるのは大変失礼ですが、この自然はIさんがいるからこそ理解できる構造でして、人の取り扱いに関しては是非大学の皆さんに考えて頂きたいと改めて思います。それが、この自然の豊かさを維持するうえで不可欠だ、という気が最終的にはいたしました。他にご意見はありますか、よろしいですか。それでは、ご報告に関して承った内容の取りまとめは、以上といたします。

(5) その他

●A委員長：最後になりましたが、所沢市のみどり自然課から、コメントをよろしくお願いたします。

○所沢市役所みどり自然課(K)：所沢市役所みどり自然課のKと申します。本日は、委員会に参加させていただきありがとうございます。私自身が、みどり自然課に今年から配属され、生物多様性というところでは、まだ勉強中の身です。実際に配属されてから、業務の内容のレクチャーを受けるときに早稲田大学さんの敷地に関する事をお伺いし、豊富な自然と貴重な知見があるということで、その重要性を教わりました。以前に私が関わった事業では、Iさんに伐採更新の情報をご教授頂き、L先生からは市役所に展示したポスターをいただきました。そういったところで、貴重な知見を頂戴しており大変感謝しています。最近の所沢市の動きですが、今年に入って企業と一緒にお仕事することが増えまして、NTTドコモ・日本自然保護協会それから所沢市、この3者で生物多様性に関わる3者協定の締結や、NTT東日本とDeep Forest Technologies社と市の3者で、ドローンを使ったナラ枯れの判定の実証実験などを行いました。こういったところで、企業と対等に役所としてかかわる為には知見の蓄積といったものを重要視してまして、そういった意味でこのような場で、皆様の報告や議論をお伺いできるのは大変重要な機会だと考えています。ですので、オブザーバーという立場になりますけども、今後もこのような会に参加させていただいて、色々な知見を教示していただけたらと思っています。長くなりましたが以上になります。ありがとうございました。

●A委員長：他に早稲田大学からあるようですので、お願いたします。

○早稲田大学総務部(M課長)：「自然環境調査室」に、新たに加わりましたスタッフの紹介をさせていただきます。7月から参りました、Nになります。

○早稲田大学自然環境調査室(N)：ただいまご紹介いただきました、Nです。7月から「自然環境調査室」に勤務しています。前職は、神奈川県茅ヶ崎市の茅ヶ崎市博物館という地域の郷土系の博物館で、自然関係の学芸員を行なっていました。そちらの時は、地域の自然環境につきまして地元の市民の方や博物館利用者の方々と共に調査を行い、それをまとめて展示やワークシ

ヨップに生かす博物館活動を行っていました。また、いくつかの大学で学芸員関係の非常勤講師なども行っていました。こちらでは非常に長い歴史がありますが、これまでの蓄積をもとに時代に合わせた内容について発展させていきまして、今後につながる仕事を行っていきたいと考えております。

3. 閉会

○評価委員会事務局（E）：A 委員長、それからご参加の委員の皆さん、大学の関係者の皆さん、今日は午後から現場を歩いて頂きまして、秋の狭山丘陵を味わえたと思いますが、その一方でナラ枯れの実態、アライグマの増加、イノシシの新たな出現など、日々刻々と自然環境の状況の変化も実感していただいたのではないかと思います。A 委員長からは自然環境のあるべき姿に最終形はない、不変の答えはない、という本質的なお話もいただきました。まさに時代背景や社会状況、そういう中でより良い選択をどう選んでいくのか、あるいはそういう実態把握を継続しながら客観的な事実を踏まえて適切な対応を図ることの、とらえ方のご示唆もいただきました。今後もこの早稲田大学として、あるいはここを取り巻く狭山丘陵全体として自然環境・生物多様性をどうとらえて、どう活かすかという事について、今回新たな委員会の運営ということの方向性も決まりました。さらに大学の方でも、課題についてご検討いただく中で、こういった取組みや機能をより充実させるために進めていただければありがたいと思いました。年2回の委員会ですので今度は年度末の3月になりますが、その時に向けて今日いろいろとご指摘いただいた課題について、より検討が深めていければと思います。長時間にわたりまして、委員会へのご参加ありがとうございました。これで、本日の「早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」を終わります。どうもありがとうございました。